

自然生クラブの太鼓は、日本の伝統的な太鼓を基礎としながら東南アジアの民族音楽やジャズなどの要素を取り入れた創作太鼓です。ひとりひとりの魂の鼓動がぶつかりあい重なり合っていく中で太鼓は表現されます。学校公演、福祉まつりなど年間50回以上演奏します。

「明日から奈良へ自然生太鼓の演奏旅行だから、畑の野菜を採っておかない」と畑から帰ってきた柳瀬敬さん。自然生クラブ代表理事は、ハンディキャップをもつメンバーたちと一緒に野菜の仕分けをしていた。

柳瀬さんが筑波山麓に一軒の農家を借りて共同生活寮「山の家」を始めたのが約10年前。ハンディキャップをもつ人たちが、自然の中であるがままに存在を認められる場所づくりだった。コミュニティって本来は障害をもつ人も、高齢者も、子どもも、みんな含めて成り立つのに、機能主義で経済を優先させる今の日本の社会に、障害をもつ人たちは適応できずにアウトサイダーになっている。人間の方が社会に適応しなければならぬ時代。社会に適応する必要なんて本当はないのに。やわらかい、でも強さを秘めた声で柳瀬さんは自然生クラブを設立した想いを語る。自分自身もこの社会の中で居心地の悪さを感じていた。こういう風に生きたいという自己実現がかえってストレスを生んでしまつた。自然生クラブを通して、心や体にハンディキャップをもつ人たちと共に、誰もが自分らしく自己表現でき、生きがいをもって自己実現していける社会、ハンディキャップを感じさせないコミュニティをつくってきたい。現在自然生クラブでは、4人のハンディキャップをもつメンバーと、子ども3人を含めた柳瀬さん一家、数人のスタッフが農

を中心とした共同生活をしている。障害者福祉の活動をしていて同じ法人格でも社会福祉法人ではなく、NPO法人取得をめざしたことにわけがある。コミュニティや環境保全といったライフスタイルの問題を解決したいと思っていたら、福祉だけの枠にはおさまらない。逆に、この問題を解決する中に福祉が生まれると思っている。自然生クラブの農業は自然との共生と持続可能な生産方法に徹している。環境を破壊し、生態系を変化させる化学肥料や農薬は使わない。生ゴミは堆肥にし、森林保全のための炭焼きもおこなっている。このように自然循環や環境にやさしく作られた農産物は、百件ほどの家庭に配られている。今後はひまわり油を利用したバイオエネルギーにも挑戦するという（環境国ドイツではひまわり油で車を走らせている実例もある）。

自然生クラブのもう一つの特徴は、表現活動である。年間50回以上は公演されるという創作太鼓は、ひとりひとりの魂の鼓動がぶつかり合い重なり合って心の奥まで響く音が生まれる。柳瀬さんはこれを、ハンディキャップのあるなしに関係なく、自然の中で蘇ってくる感性」と表現する。

柳瀬さんの話は、自然と一体化した生活の中で、自分の肉体を動かす、汗をかいた活動の中から生まれる実践者の言葉だった。

（文/藤枝 利枝）

DATA

特定非営利活動法人
じねんじょ
自然生クラブ

〒300-4211

茨城県つくば市白井1643

/FAX 0298-66-2192

E-Mail: jinenjyo@minos.ocn.ne.jp

HP: www3.ocn.ne.jp/jinenjyo

目的

（定款第3条より）

この法人は、環境保全型の地域循環農業の実践、持続可能な環境共生型生活様式の提案、並びに、知的障害者（以下、「障害者」という）の社会的ハンディキャップの解消、生活の質の向上、社会参加、ノーマライゼーションの実現に関する事業を行うことにより、地域社会の公益の増進に寄与することを目的とします。